坂総合病院医学生だより
坂坂 バン バン MIN-I-REN

〈発　行〉
坂総合病院
医学生と共に歩む委員会
連絡先・塩釜市錦町16-5
☎022-367-9007
2011年　7月　10日
No. 58

2011 年 3 月 31 日に行われた全職員集会の参加者。前から 2 列目の左端が今田隆一院長。

ホトトギス

坂総合病院院長　今田　隆一

5月の末から仙台では朝方、ホトトギスの鳴き声が例年になく喧しい。吉村昭著「三陸大津波」には過去3度に亘った三陸の大津波の前に2つのこと、１ヶ月前の大豊漁と直前の井戸の異変が共通してあったと報告されている。しかし今回の東日本大震災にあっては漁業関係者にいろいろ聞いたが、そうしたことはみられなかったという。井戸はそのものが既に身近にないのでわからない。前兆がなかったならば、換わってホトトギスの喧しすぎる鳴き声は震災後の特殊な現象ではないかと考えたくなるのは人情であろう。

ホトトギスとくれば正岡子規である。子規とはホトトギスのことである。結核の喀血を「血を吐くまで鳴く」ホトトギスになぞられたといわれている。子規は病没する直前まで随筆や日記を書き続けたことが知られているが、その中のひとつ、「病床六尺」に身の苦痛と闘いながらこう書いている。「体の弱ったためか、見るもの聞くもの悉く癪にさはるので政治といはず実業といはず新聞雑誌に見るほどの事皆我をじらすの種である」と。まさに今の私の心境そのままである。

震災は改めて日本国憲法が保障している基本的人権の大事さを示した。避難所や仮設住宅での苛烈な生活はまさに憲法25条の中身の保障が問われた。国は「すべての生活部面について」「健康で文化的な最低限度の生活」の保障のために必要な「社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進につとめなければならない」のである。居住権や財産権保障にも国の責務があるのは同様である。にも係らず被災者の自助努力や規制ばかりを優先させようとするのはいかがなものか。

ホトトギスの鳴き声は通常「テッペンカケタカ」と聞き倣す。建屋が吹き飛んだ福島第一原発を皮肉るようだ。その福島では多くの県民が生活の基盤どころか住む場所自体をうばわれている。人権を回復させるためには今や原発自体の存否まで問われてきているのだ。

因みにホトトギスが喧しいのは結局、私が震災後の体調の変化のためにいつもより2時間ほど早めに目が覚めてしまい、彼の鳥の声を聞く機会が増えたためだけのようだ。ホトトギスに罪はないらしい。

『地域』のために何ができるだろう？

～東日本大震災を通して～

坂総合病院リハビリテーション科
医師　藤原　大

2011 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分、その時は突然訪れた。激しい揺れとその後に押し寄せた巨大津波は、地域に住む方々の日常の幸せを、一瞬にして奪っていった。私達は、地震発生直後より災害医療体制を立ち上げ、地域の要求に答える準備を整えた。ずぶ濡れで低体温の方々、停電のため自宅で過ごせなくなった在宅酸素を利用する方々、家族に介護されていた寝たきり高齢者、大きな外傷を負った者、出産予定間もない妊婦、震えの止まらない子供達、行き場を失くした老夫婦…。様々な問題を抱える住民達が、連日次々と運び込まれた。私達は、職員個々の生活もままならない中だったが、全国から駆けつけた支援者の協力も得ながら、災害医療を継続した。

そんな中、3 月下旬に私は初めて地域の避難所を訪れた。多賀城市内のとある中学校の体育館。震災直後は数百人が収容されていたようだが、その時点での避難者は 81 名。津波被害で自宅が居住困難となった方ばかり。震災直後からの避難生活でほぼ寝たままの状態となった高齢者、母親に抱かれて眠る発熱の小児、周囲との調和がとれない認知症の方など、状況は様々だった。食事はわずかなパンとおにぎり程度。排泄物で汚れたトイレを使用し、入浴など何日もできない状態。皆余震の恐怖に怯えながら、先の見えない日々を過ごしていた。

私は『リハ医』という立場で、避難所リハ支援に関わることにした。障害を抱えながら避難所で過ごす方の生活支援と環境整備のため、理学・作業療法士による個別リハを行った。高齢者を中心に避難所内で活動性が低下する方々のため、地域ボランティアと協力して、集団体操を行った。週 1 回は避難所内を巡回して、経時的に問題を拾い上げる取り組みを継続した。時には、避難者の悩みを聞き入ることもあった。

災害後の地域のニーズは、時間経過とともに変化する。災害発生直後は、極めて高い医療ニーズが信じられない勢いで増加する。その後も医療の必要性が継続はするが、徐々に衣食住を中心とした生活面でのニーズが増加してくる。私達医療関係者には、医療支援とともに、生活面での援助を行う視点と行動が求められる。ニーズを正しく迅速に拾い上げ解決するため、柔軟な思考と強い決断力・リーダーシップが必要だと実感する。

これから医師を目指す医学生の皆さん。医師としてこのような状況に置かれた時、皆さんなら何を考えどんな風に行動するだろうか？これからも地域のため、皆さんとも一緒に考え行動し、ともに成長していきたいと思う今日この頃である。

津波被害の被災地を訪れて

坂総合病院　研修医
千葉　茂樹
（2011 年東北大卒）

石巻青空健康相談会

去る 5 月 14 日（土）に、石巻市のみやぎ生協石巻大橋店で青空健康相談会が開かれました。私の実家は南三陸町で、幼い頃からよく石巻に行っていた縁もあり、ぜひ協力させて頂きたいと思い、飛び入り参加させて頂きました。

移動中、三陸道から眺める石巻の風景は普段と変わらないように見えましたが、少し市街地に入ると「ここまで波が来たのか」と思わせられる場所まで津波の傷跡が残っていました。

私は大学時代陸上部に所属しており、昨年は毎年 11 月に石巻で開催されている宮城県駅伝大会に参加したのですが、そのコースも津波被害を受けており、わずか半年の間に変貌した風景に心痛むものがありました。石巻港の近くまでは行きませんでしたが、さらに海に近づくほどに懐かしい風景は失われていて、心に受ける衝撃は大きかったのではと思っています。

相談会の内容は、全日本民医連の支援の医師・看護師・ソーシャルワーカーなど多職種による健康相談会と、支援物資の提供に加え、炊き出しも行いました。当日は盛況で、物資や炊き出しが目当てで来ている方も多かったのですが、健康相談の方もなかなかに忙しく対応させて頂きました。

血圧を測って欲しいという方が多く、他に感じた傾向として、地震・津波による精神的影響を訴えている方が多かったようです。震災から 2 ヶ月が経った時点でしたが、余震が不安で安眠できなくなったという方、津波の映像が心から離れず会話中に今にも泣き出しそうな方もいました。相談会では処方や治療行為はせず、治療が必要と判断される人には開業中の石巻の病院受診を勧めました。津波で職を失い血圧の薬を求めにきたある方は、薬は渡せないと伝えると、「薬は欲しいが職がなく、とても病院を受診できない」と言い残し足早に去っていきました。

津波で職を失った方の厳しい現実を実感する場面でしたが、被災地では被災者の医療費はある月までは免除されるのに、それが周知されていない実情が反映しているのだとも感じました。

つまりは、今回の相談会は多くの被災者の方の援助になったと思いますが、医療の本当に必要な人にこそ何も行き渡っていない現実があるのだと考えさせられました。

まだ医師としてスタートしたばかりの自分にできることは少ないですが、微力でも多くの被災者の方のために貢献できることを考えていかなければと深く感じた相談会でした。

被災地訪問と被災者からのお話

5 月 28 日（土）に、東北大学の新入生が坂病院の病院見学会に来ました。例年は、4 月の東

北大新歓行事である七ヶ浜合宿の際に、午前中の時間を使い見学会を開いていました。今年は震災の影響で、5 月に被災地訪問を兼ねての病院見学会となりました。かくいう私もはるか昔、2005 年の病院見学会に参加したご縁から、現在坂病院で 1 年目の研修医をやっています（汗）。

今回は予想を上回り、5 名もの新入生が来てくれました！病院見学は新入生の方にとって初めての病院体験ということで、とても新鮮な気持ちで見学していたようです（2 年目の矢島剛洋先生が案内してくださいました）。

被災地訪問と被災者である友の会会員様のお宅訪問について報告します。

被災地訪問は、津波被害のあった七ヶ浜、多賀城地域を一年生 5 人と車窓から眺めて廻りました。5 人のほとんどが宮城県外、むしろ西日本などから来ている方で、津波の被害を直に見るのは初めての方が多かったです。塩釜・松島地域は湾が島で守られており、津波被害はそれほど甚大にならずに済みましたが、七ヶ浜などは家が完全に流された地域もあります。私の実家は宮城県の南三陸町で、多くの知人と同様に家が流されて跡形も残っていません。そのため、そのような津波被害は見慣れていると思っていましたが、あらためて失われた町の景色を見ると厳しい現実に愕然とさせられました。初めてその様子を見る一年生の皆さんには、なおさら衝撃的な光景だったと思います。

車は七ヶ浜、多賀城地域を廻り、友の会会員様のお宅へ向かいました。初めお宅に着いた時は、家の外観や町並みはきれいで、ここは津波被害のなかった地域なのかと思いました。お宅の中に入ると、一見何事もなかったかのようでしたが、真っ黒に汚れたこけしが置いてあるなど次第に違和感を覚えました。

会員様のお話を聞くうちに、実はその地域も 2m 弱の津波が来ていて、そのお宅も 1 階の半分ほどが波に浸かったとのことでした。よく観察すると波がここまで来たというラインがはっきり家の壁に残っており、津波に浸かって塩分で変形した 1 円玉などの硬貨を拝見した際には、一見して気付かないところにまで津波の被害は及んでいると痛感させられました。

多くの損害を被っていながらも、家が残っているが故の苦しみもあるというお話もあり、震災当日の過酷な状況も含め大変貴重なお話をして頂き、一年生の皆さんは真剣に聞き入っていたようです。また、多くの診療所が機能しなくなった中で坂総合病院が奮闘していたというお話もあり、この地域における坂総合病院の立場・重要性についても少しは理解してもらえたかと思います。坂総合病院は医療者と地域住民が共につくり上げている病院だという説明に、感銘を受けていたようでした。

今回の大震災を経て、坂総合病院周辺地域だけでなく、宮城県の医療は大きく変わると思います。その中で、これから医師を目指して努力していく一年生の皆さんには、自分がどんな医療を展開していきたいか、さらには宮城県に来たことも何かの縁ですので、宮城県の被災者・地域のために何ができるかをぜひ考えて欲しいと思います。そして、また坂病院に見学に来てくれることをお待ちしております！

これまでの初期研修の振り返りと研修医生活の紹介

坂総合病院　研修医
矢島　剛洋
（2010 年札幌医科大学卒　弓道部）

★研修医になるまでの自分の心境

初期研修は中規模病院の市中病院で研修したいと考えていました。ありふれた病気を診療できるようになりたい、手技をたくさんやりたいという気持ちがあり、自分でまず考えて指導医から多くのことを学べる研修を望み、この病院にたどり着きました。

★実際に研修医になってから

予想通り、後ろで立っている暇のない研修生活がスタートしました。当院の研修は独り立ちも早く、時間外外来の 21:30 から翌 8:30 までの Walk-in 患者の診療を、1 年目の 8 月に独り立ちします（必ず上級医 1 人が相談役として常駐）。また日中の救急車当番を 1 年目の 10 月に独り立ちします。これは全国的にも早い病院なのです。しかし、「一人でやっといて」というのではなく、上級医に相談でき、次へのステップアップができる環境です。毎日多くの新しい経験をし、一つ一つ振り返りながら学び、着実に力をつけていくのが当院の研修のスタイルです。

また、中心静脈穿刺、気管挿管、除細動、人工呼吸器管理、動脈血採血、ルート確保、心エコー、腹部エコーなどなど、学生の興味をそそられる手技を、1 年目の早期からたくさん経験できます。

初期研修 2 年間では内科(循環器科、呼吸器科、消化器科)、外科、小児科、産婦人科、救急部、精神科、脳神経内科・外科を学び、総合力を身につけることができます。

★現在の研修医の概要

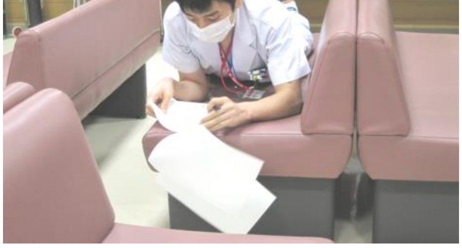
2011 年度現在、2 年目 5 名、1 年目 7 名がいます。また内科総合研修として 3 年目が 6 名います。北は北海道、南は鹿児島県出身の先生がいて、東北のみならず全国出身の研修医がいます。

★私の研修医生活

日中は上記のとおり、内容が充実していて忙しく勤務しています。当直は月に 4-5 回あります。全科当直なので生後 1 ヵ月の赤ちゃん、妊婦も含めて何でも来ます。しかし、休日は比較的ゆっくりと過ごすことが出来ます。休日は仙台へ買い物、年に一回は 1 週間の旅行(今年はディズニーランドと沖縄へ)、実家の札幌に帰省（昨年 5-6 回）もしています。学会での演題発表の準備など学術活動も行っています。

★学生の皆さんへ

私たちの病院はやる気にあふれた研修医が集まってきます。上で書いたことをぜひ実際に目で確かめて欲しいと思います。実習はいつでも受け入れ可能です。ホームページで坂総合病院を探してみてください！



職場紹介①　放射線室

安全で最良の画像が提供できるように

診療放射線技師　鈴木　陽平

医学生の皆さんいかがお過ごしですか。坂総合病院放射線室について紹介させていただきます。

当院放射線室では放射線科医 1 名、診療放射線技師 16 名（そのうち女性技師 3 名）が所属し X 線一般撮影（よくレントゲンといわれるもの）、ポータブル撮影※1、CT※2、MRI※3、消化管造影、血管造影、結石破砕など様々な設備を持ち 24 時間 365 日いつでも患者様の検査が出来るように備えています。

「放射線」という言葉を聴くと「怖い」とか「危険」「よくわからない」などのイメージがあると思いますが、装置は日々点検されており安全にかつ最良の画像情報を提供できるように管理されています。このような装置を操作する放射線技師は気難しいとか頭が固そうなどといわれることがありますが決してそんなことはありません。放射線室内は和気あいあいとしており家族のこと、笑い話など話題が絶えることがありません。もちろん業務中は真剣な顔をしていますが（笑）

さて、放射線技師が日々どのような業務を行っているか紹介します。日中は外来、病棟の患者様、救急搬入された患者様など医師の要望により様々な検査を行います。昨年 7 月に導入された最新型の CT の検査は頭蓋内の出血や梗塞、大動脈解離の有無など短時間で膨大な情報を得られる検査として大変重宝されています。また、この CT により以前から行えていた血管や骨の 3D 画像の構築だけでなく心臓の 3D も撮影できるようになりました。これは心臓カテーテル検査とは違い非侵襲的に心臓の外観、内腔、周囲の血管（冠動脈など）を観察でき診断に活用されています。

その他にもまだまだ検査装置がありますがとても書ききれません…。「百聞は一見にしかず」ということでぜひ坂病院に体験に来ていただければと思います。賑やかなスタッフ総勢 16 名でお待ちしております！！

※1：救急室や病棟など撮影室まで来られない患者様のため移動可能な撮影装置　※2：コンピュータ断層撮影のこと。体を輪切りにすることで体内の状態を検査する装置　※3：磁気共鳴診断装置のこと。磁場の力を利用し体内の情報を得る装置

職場紹介②　7 階病棟

☆明るく活気のある病棟です☆

看護師　鈴木　咲

医学生の皆さんお元気ですか。今回は 7 階病棟の紹介をさせていただきます。

7 階病棟は消化器内科病棟で、消化器科医師 4 名、重点研修医師 2 名、研修医 2 名、看護師 29 名で働いています。スタッフがとても元気で活気のある病棟です。主に、消化器疾患及び内科一般の疾患を持つ患者様が入院しています。各種内視鏡検査、治療が行われており、術前の方や早期の胃癌で内視鏡的に切除が必要な方、PTCD（経皮経肝胆管ドレナージ）、PTGBD（経皮経肝胆嚢ドレナージ）を挿入される胆道疾患の方、胃瘻を造設される方、癌の化学療法の方等が多く入院しています。

病棟の特徴は、高齢者や慢性疾患、入退院の繰り返しが多いなど、生活背景と密接な関係にあることです。患者様を中心に置いた治療や看護を心がけ、また他職種（リハビリスタッフ、薬剤師、MSW など）との連携をとり、チーム医療に取り組んでいます。ターミナル期の方は、緩和ケアチームと協力し、患者様の疼痛コントロールなど緩和ケアに取り組んでいます。死を迎える患者様とそれを支える家族。それぞれの想いと葛藤の間に私たちは悩み苦しむときもあります。そんなときはそれぞれの想いを受け止めつつ、医師を交え何度もカンファレンスをしています。患者様、家族にとってなにが一番良いのか、皆が同じ視線で患者様のケアに携わっています。

そんな 7 階病棟で有名なのは、なんといってもナースステーション前の 2 匹のラスカル人形ちゃん。もともとは以前入院していた患者様から頂いたものなんです。毎月季節に合わせた洋服をスタッフがなんと手作りで作っているからびっくりですよね。4 月は幼稚園児姿、5 月はランドセルを背負った小学生姿、6 月はウエディング姿、現在は麦わら帽子をかぶりアロハシャツを着用しています。毎月ラスカルが衣替えをするのを楽しみにしているスタッフや患者様も多いはずです。8 月はどんなかわいい服をきて私たちを和ませてくれるのでしょうか(^^)ぜひ 7 階病棟に体験に来た際はラスカルちゃんを見ていってくださいね！

スタッフ一同、みなさんのお越しをお待ちしております。